

虚像

karinomaki

まぼろし

完全な孤独の中で生きていた私に、大きな恋が芽生えた。しかし、その人は精神科医だった・・・。

先生は厳しいひとだった。私を何回も怒りとばし、私は何回も泣かされ、そのうちに、先生は厳しさの中で患者さんをきたえるひとだと信じるようになり、先生への深い愛が芽生えた。しかし、その愛は全くの幻想だった・・・。

私の先生への気持ちはとても美しかった。でも、全てはまぼろしと共に消えていった。

信じる

私は、精神病患者。先生を信じないと治らない。その枠組みのようなものが、恋と錯覚されていた。

カント哲学のカテゴリーと同じだ。（カテゴリーとは、思考を整理する枠組みです。）

私は、どんなに先生に泣かされても傷つけられても、先生を信じないといけなかった。私は入院患者だったから。

でも、退院してまで、先生につらくあたられて、目が覚めた。

眠り姫

私は先生の患者になるまで、強い薬で眠らされる日々を送った。先生は、そこから目覚めさせてくれた。だから・・・私は先生を王子様だと錯覚したにすぎない。

眠り姫と同じだ。

先生は王子様などではない。生身の感情を平気で私にぶつけ、何回泣いたかわからない。退院した今、愛がすっかり冷めた今、もう先生の優しい目が見たいなどと思わないで、うつむいて診察を黙々とただ受け続けるだけにしよう。もう恋は終わったのだから。

虚像

私は精神病患者。虚像の中で生きている。でも、やりたいことがたくさんある。最後に、ピアノを弾く女性に魅せられる詩を書こうと思う。私は、ドクターになりたかったのに、精神病患者になってしまった。父は内科医で、私は先生の白衣の中に虚像を見ていた。

ピアニストにもなりたくて、あるピアニストに恋をしたこともある。

自分のあこがれの職業の人には虚像を見やすいのですね。

ピアノの詩

君は白と黒の鍵盤に、不思議な魔法をかける。

この魔法は虚像？

なんだかいつもの君とちがうんだ・・・

コンサートホールで君を見た。

僕はまぶしくて、手に汗を握った。

君はまぼろし？

ピアノの世界の鏡の中に入ってしまったかのようなのに、確かに、確実に僕の心を打つ。

いつもの君が見たいと思っているのに、君は別の世界に入ってしまった。

僕にはもう君はまぼろしでしかない。

だって、君のいつもの優しい瞳がピアノを弾く君にはないんだ

さようなら、愛しかった僕の恋人。

どうして、僕とピアノを切り離すの？

僕はおいてきぼりにされないように、君と離れて僕のすすむ道に行くよ。

でも・・・ピアノを弾く君に魅了された僕の恋だけはうつくしかった。

やりたいことを、感情をおきざりにしてまでやり通す君に僕はついていけない。